

# 幕末期宇和島藩の動向(11)

——伊達宗城を中心に——

三 好 昌 文

前号 (第12巻第3号)

B) 攘夷の実行～第一次幕長戦争

イ) 宗城帰国中の内外情勢と第一次幕長戦争

宇和島藩の京都警衛

宇和島藩の対応

第一次幕長戦争

天狗党始末

宗城と諸大名の交信

ウ) 慶応の改革と富国強兵策

本号

軍事改革

C) 第二次幕長戦争～王政復古

ア) 長州処分問題—長州藩主父子の江戸招致

イ) 第二次幕長戦争

薩摩藩と長州藩

第二次幕長戦争への動き

宇和島藩の出兵

## 軍事改革

慶応の改革は、実質的には同2年から開始される。それは第二次幕長戦争の発生を予想したものであったから、実際にはその進行過程と合わせて実施されていく。従って、同元年の段階では、大規模な軍事改革は見られない。また、宇和島藩は伊達宗城が攘夷派であったため、沿岸砲台、軍艦を先行させて考え、内戦を予想しての軍制改革などはあと回しにされた感がある。他の雄藩が開国後、つぎつぎに軍艦・蒸気船等を輸入し、反射

炉を設けて鉄製大砲を製造し、新式小銃を輸入するが、その面でも宇和島藩はしだいにとり残されていく。薩長など先進的雄藩との並走はできない!

慶応元年2年22日、爾後、江戸往復は尾ノ道渡とし<sup>2)</sup>、藩主の乗船関船2隻を売却し、供船は尾ノ道で借船とすることにした<sup>3)</sup>。しかし、前年冬の征長出陣時、下関で建造の早船(5, 60石~7, 80石積)は、水主3, 4人~6, 7人で1隻に15, 6人~2, 30人を乗船できる。宇和島藩船南渡丸の場合には、船方20人、浦水主50余人を要して4, 50人を乗船させるに過ぎず、下之関の早船の方が軽便、堅牢だから、関船の売却費で下之関の造船士2, 3人を雇用して2隻を建造させた。これは参勤交代のみならず、長州再征を予想しての兵員輸送をも考慮してのことであろう。

3月2日、藩は諸品の運上銀を3割増とし、魚類(干鰯、搔鰯)類の五分一銀の魚価を150%に増額し、雑魚は200%割増とした<sup>4)</sup>。三崎・三机両浦の役鮑は従来3,000盃の定めであったが、五分一銀は免除とし帆別銀の外銀2匁上納してきた。これを鮑座運上銀は文久3年までは銀170匁であったが、翌元治元年からは銀2貫700匁に改訂し、帆別銀は免除するとした。これは蠟座・鰯座札にも適用され、大工・木挽・鍛冶・樽屋等の職人・商人の分一銀制(十分一税)の増額にも適用された。3月20日、松根図書・若松総兵衛が長崎から帰藩している。運上銀等の増額は、武器の購入等とも結合していたようである。

3月29日、新谷藩家老加藤衛士が極秘に来藩、その親族梶田貞吉を介して清水飛驒・松根図書に面会した<sup>5)</sup>。その用件は、ゲベール銃の所望、「放方御伝授」、本藩(大洲藩)同様の懇親の3点にあった。図書は宗徳の内意によって、「目下西洋ニテハ猶一層精巧の銃アレバ、其方可ナルベキモ、ゲベール銃ハ猶和銃ニ勝レリ、伝習ハ我藩モ未熟ナルモ、知り得ルタケハ伝フ可シ、目今ノ時勢是ヨリコソ懇親シ、互ニ隔意ナキヲ願フト」述べている。これによって、4月20日、加藤衛士・長尾鷹弥・持筒尾形半兵衛の3人が修行のため来藩し、11月7日には国製(宇和島藩の倣製)ゲベール銃50挺を1挺5両で売っている。図書は長崎で五代を介して、エンピール銃(エンフィールド銃)・ライフル銃という新式

銃を見て、これでの藩兵の武装を進行させており、宇和島藩ではすでにゲベール銃は旧式と認識されていた<sup>9)</sup>。宇和島藩ではエンピール銃という前装式ライフル銃採用の段階に入っており、ゲベール銃は払い下げてもよくなっていたのである。同時に、第二次幕長戦争の勃発目前にして、瀬戸内海側の燧灘の要港三机・伊方・磯崎浦への経路確保のためには、宇和島藩にとって、大洲・新谷両藩や松山藩との緊密化は戦術的に重要なことであった。

4月17日、医師布天民（志賀天民）の次男泰山に西洋兵学のうち地理・測量学・数学の修行を、脇田孫兵衛三男政一・町田弥兵衛四男呈蔵に同じく城砦・陣営・砲台攻守築造の修行（江戸遊学の予定であったが中止）、篠田弥太右衛門倅政六に徳久忠介に従学して測量学（図3の渾発測量、鎖分度規見盤定木・藤縄等と謄写料を下付）、医師玄達倅玄凱に泰山と同じ修行を、5月2日三条目十郎兵衛組助作・元締支配熊一郎に築造学修行、同月17日に松崎紋右衛門次男健次郎に答古知幾修行がそれぞれ命じられている<sup>7)</sup>。

4月30日、清水飛驒・田手次郎太夫・若松総兵衛が銅山見分に行き、5月4日に帰着している<sup>8)</sup>。この銅山は日土村今田銅山と考えられ、当時の銅山引受は中平惣之丞・田中六左衛門であり、稼人を雇用して採鉱・精練を行っていた。

3月25日、家老宍戸弥左衛門・桜田出雲・金子敬策（拙蔵と改名）・若松幹太郎が江戸に着いている<sup>9)</sup>。金子・若松は「横浜ニ至リ師ヲ求ム」とある。その師の姓名は不詳であるが、4月9日に師を得て、「其師及周旋人へ琥珀二反ヲ、アレキサンドルへ中折（〇和紙）三束<sup>外ニ菓子ヲ</sup>ニ同三束<sup>外ニ茶ヲ</sup>ヲ、原永五郎ニ催合ニテ贈り度ト願出、許可」とある。子安は神奈川奉行手附翻訳方出役であり、5月3日に2人は子安方に止宿し、若松は地理・測量・算数を、金子は英学を学ぶことになった。2人は同月16日、居を横浜に移し、閏5月朔日、師家に近い借宅に居住、さらに「関門外居住差支アリ」として、和蘭通弁馬田源十郎方に寓している。若松は子安に学んだと考えられるが、英学にも通じていて、「其師」とは村田蔵六（ヘボンに英学を学ぶ）の紹介によるヘボン（Hepburn, James Curtis）<sup>11)</sup>ではないかと推察される。元治元年から慶応元年

にかけて、宇和島藩の富国強兵策は、下士・町人の俊秀を遊学させ、物産開発から軍制改革までを推進するという大きな転回期を迎えている。

4月27日、「電フル小銃鑄形少ク、玉薬ノ製造ノ製造粗ナレバ、銃身ニ害アレバ、之ヲ製造シテ払下シム」との記事があり<sup>12)</sup>宇和島藩ではライフル銃の倣製・量産も可能になっている。また、同日、物産方が拡張され、松根凶書・伊能下野・清水飛驒らの掛員が出席している。翌28日には中国筋から上田一学・山内新左衛門が帰着している。長州探索のためであろう。4月29日には宍戸弥左衛門・三浦静馬が「形勢探索」のため横浜に行っている。宇和島藩の触手は、鹿児島・長崎・防長・京坂・江戸・横浜に伸びていることになる。

### C) 第二次幕長戦争～王政復古

#### ア) 長州処分問題—長州藩主父子の江戸招致

長州処分問題についての幕府方針中、宇和島藩に直接関係するのは、長州藩主父子の江戸招致の件である。慶応元年(1865)3月11日、その幕命が宗城に届いた<sup>13)</sup>毛利敬親父子と姻戚関係にある藩州竜野藩主脇坂淡路守(安斐<sup>やすあや</sup>、安宅の養子)と大洲藩主加藤遠江安(泰秋)に江戸招致の取り扱いを命じ、さらに警備として尾張大納言(徳川<sup>よしのり</sup>義宜)・大目付塚原但馬守らを命ずるというのである。すでに、長州藩内に武備恭順派の台頭が見られる時期に、遠隔地にある3藩に江戸招致を敬親父子に納得させよというのは到底無理なことである。宗城には長州領内、在府中の脇坂・加藤両侯には家老らを長州に派遣せよという難題である。これは実行もできないが、これだけで長州藩尊攘派から敵対視されるであろう。

宗城は3月13日、家老桑折駿河、監察(目付)三輪清助を急遽竜野に派遣し、時宜により上京させることにした。この日午後、大洲藩使者永田権右衛門(参政)・高田忠次郎(急務掛)が来藩し協議している。14日、三輪は岩国の状勢を探って竜野へ赴き、さらに井関斎右衛門とともに岩国を探って帰国し、宗城に情勢を報告した。宗城の幕府への答書には、幕命には「疑惑」の点もあるので、

「竜野辺迄家老差出、大目付御目付（○御手洗幹一郎）衆江為伺可申、且当今防長諸地江奇兵隊屯集、動乱相起り、所々之通路断隔仕候風聞も御坐候ニ付、先日中<sup>（×）</sup>為探索家来差出置候故、不遠罷帰候ハ、弥内地之事情相分、取扱之儀成否目度相付哉、（○中略）此度之義者不容易儀、万一御主意通取扱、不行届義御坐候而者、恐悚之至、第一御威光にも関係仕候間、取扱之目的処置之成否、重々粉骨考量可奉御沙汰候得共、何分輕拳難仕次第、可然御含置被成下度奉希候」と述べている。江戸招致は困難であり、その失敗は幕府の權威に係るといっているのである。

5月13日、桑折駿河・三輪・林基吉郎・山内新左衛門・兵頭嘉九郎が京都から帰着した<sup>14)</sup>。前月27日に竜野から上京していたのである。その前日には、紀州藩主徳川茂承が征長先鋒総督に任命されていた。幕府は敬親父子の招致によって服罪させ、將軍進発を停止させようとしたのだが、時宜を得た処置ではなかった。

先述の大洲藩使者も、「大凡万石ニ付士分五人足輕七人、倍卒迄ニテ百人位モ（○下略）」の少人数しか長州へは派遣できぬと、大目付塚原但馬守らに訴えている<sup>15)</sup>。幕府も「素<sup>（×）</sup>戦争ニ罷出候筋ニハ無之、万一長防蜂起致候得は、三手（○三藩）国ヲ傾ケ人数差出候而茂、乍失敬勝利者無覚束、依之多人數被差出候ニ者及間敷」と言っている。また、三条実美等五卿も江戸招致の方針であり、これは細川越中守（韶邦、熊本藩主）・有馬中務太輔（慶頼、久留米藩主）・松平修理大夫（茂久・忠義、鹿児島藩主）・松平肥前守（直正・閑叟、佐賀藩主）に命ぜられている。尾張藩前藩主徳川慶勝の率いる藩兵を大坂に待機させ、毛利敬親父子・五卿を大坂まで連行させて引き渡せるという方策であった。

宇和島藩は3月中に藩兵派遣、大洲藩は4月中に芸州に派遣と言い、両藩の間には齟齬があった。そこで、使者吉田新兵衛は来藩したが、宗城は津島組御内村に行っており、吉田は西園寺雪江と同道して同地に行き、翌日帰城して吉田は自分の見解を示した。雪江は「此度之御役は実以重大之儀」とし、「吉田、塚原殿江応接之次第」等を宗城に話した。禁門の変については敬親父子は関知

していないと言っており、江戸招致は至難であり、長州藩士は承服せず、「万一相渡不申節ハ何共不容易次第ニ押移リ可申」と述べ、宗城の意見を求めた。宗城は(1)敬親・元徳父子は降伏しているのだから、江戸招致は当然とする。(2)父子が招致に応じても家来が反対した場合、どう説得するのか。長州藩が降伏と言っているのだから、父子も家来も「異義者無之道理」、父子を渡さない方が「如何之モノニ候哉」と宗城は強硬な姿勢を示す。(3)招致問題は長州藩の降伏の姿勢の「根元疑之強キ所ヨリ起」こっている。宗城はその通りと答えている。(4)藩主父子の招致は、「君臣之義理情合」からも難しく、無理をすれば内乱となり、「皇国之御大事」となる。宗城は招致問題は三藩も同様の存在だが、「乍併此度之義者諭解之筋ニテ、戦争之義ニハ決而無之」と、避戦の態度を前面に出している。結局、宗城は幕府に敬親父子の身上に「御障格別有之間敷、毛利家名も相立候道理」、従って招致に反対する方が毛利家の存立を危うすくる。この点を説諭して「軍者致サス心得也、夫故大砲且甲冑杯ト申義者無之方可然欵と、拙者ハ存候」と答えている。岩国藩主吉川監物の例を引き、「人物ニモ有之」、これまでの粉骨碎身の周旋も見られることだからと、直接長州藩と交渉するのではなく、岩国藩の誠実な周旋を期待している。結局、幕府は長州藩の服罪の実態を知るために敬親父子の招致を命じているのであり、宗城はこれを周知の上で招致に及ばずともよい、後は第二次征長軍に任せればよいと考えているのである。つまり、長州藩の反対は征長軍の攻撃の口実をつくることになる。「此度万一事破候而モ、御藩（○大洲藩）之御不行届と申ニハ無御坐、是迄之降伏、真之降伏ニ無之故之事也、昨冬以書附降伏申出候節、尾州侯始欺れ候と申筋ニテ（○下略）」と、宗城は敬親父子の服罪の真偽は、幕府の裁許を受けてのことと言い、「御召寄之場ニ至リ、夫ハ兎ヤ角申出候テハ、真之降伏ニ者無御坐」と断言している。宗城は心底から長州藩の尊攘派を敵視していることが分かる。

3月朔日、大洲藩留守居役は塚原但馬守に会い、幕府の真意を質している。毛利家と親戚の縁で招致を命ぜられたのだが、「万一家名断絶、共身切腹被仰付候様相成候而者、親戚之信義ヲ破リ、彼之激怒ヲ招、如何様之禍害ヲ可生モ難

斗、何れも深心配仕候」と述べ、幕府の処分方針の機密を尋ねている。「兵端相開 皇国之禍ヲ醸」す場合も想定しているが、塚原は「拙者之心配第一番、其次脇坂殿ニテ」、大洲藩は家来のみ派遣で、「心配も薄き道理」と答えている。

宇和島藩の長州藩に関する情報収集は、つぎつぎにもたらされた。3月29日、山内新左衛門、上田一学が防州岩国から帰藩し復命している<sup>16)</sup>。すでに2月17日岩国着、同藩家老宮庄主水、密用掛井上司馬太郎と対話した。武備恭順論を藩論とした長州藩は、高杉晋作らの正義派諸隊が、征長軍の撤兵と同時に諸隊を藩内の要地に配備し、武器弾薬の充実に努めていた。山内・上甲の報告によると、正月2日、勇激隊が馬関撫育倉、3日三田尻を制圧し、7日暁天絵堂で俗論派の栗屋帯刀軍を砲撃して大敗させた。長州侯の鎮撫もあったが、14日に「匪賊」(正義派)が圧勝、吉川監物も出馬しようとしたが中止した。18日、清未侯(毛利元純)が鎮撫の建白をしたが、山口は激徒に占拠され、民衆は「此節ニ而ハ皆々奇兵隊様ト欽仰仕居候」という状況になった。激派は吉川監物の宗藩防衛の周旋をも敵視する有様であった。14日には五卿は九州に移転していた。「諸隊一同巨魁之者」は高杉ら6人、奇兵隊士10人の名が把握されている。長州藩内は幕府の予想以上に武備恭順派の制圧するところになっていた。

4月2日、井関齋右衛門が岩国より帰り復命した。応接人今田鞆負ら3人から情報を得ている。岩国から萩への三街道は、山口通り・中通り・石州路とも人別改め、通行断絶がなされ、岩国藩も宗藩との連絡は杜絶していた。激徒は大島郡農民を説得し、徳山藩と岩国藩の離間策をはかり、山口城破却は石垣をすこし除去したのみで、修造して激徒の巨魁が集会している。諸隊の巨魁は5、60人であるが、農兵も加えると「千余之人数之由」、山口辺には砲台を構築し、幕府の再征に備えるという。とくに、將軍上洛の勅書を知り、「朝ハ寛、幕ハ酷と申」、幕府への怨恨を深めている。「大膳父子出府之義疾伝承、人気不穩、吉川家ニ而者別而心痛之趣之事」とあり、江戸招致は幕府の机上論であったことが分かる。奇兵隊は下関戦争で実戦を経験し、とくに砲撃戦に長じていた。「此上父子嚴科被処、削封等有之候ハ、一藩動揺者勿論、其余諸大藩方ニモ暴論

紛々可相生者眼前之義」，外患を前にし内乱を醸成すれば，「皇国」は分解することになると情勢を聞いている。とくに薩摩藩と長州藩の接近，再三使節が来て大島吉之助（西郷隆盛）も来た。福岡藩とは従来通り懇親がはかられているという。

同じく4月2日，京都留守居役岡田八郎兵衛より，招致問題についての近衛公・久世卿への質問の内容が届いた。それは岡田が近衛家側役岡谷将監から渡された「御沙汰書面」で，将軍が上洛して「外夷大患，長防所置之重典，危急之世態 皇国治乱之境，別而被惱 宸襟候」と，毛利侯父子・五卿の招致の幕命について，「不穩之勢，此上相当之所置ヲ失ヒ，變動ヲ醸候而者，内外不可救之勢顕然ニ而（○下略）」，将軍上洛を以て内政の確立をはかることを述べている。さらに，岡田は尾張藩用人田宮如雲に会い，招致問題を質した。田宮は「御三方は御沙汰在之趣，風聞ニハ粗承知有之候得共，太段尾州様江改而右之義御沙汰在之事ニ茂無之」と，尾張藩への長州侯父子警衛の幕命を曖昧にし，「右躰故，都而 天朝江御窺之上御沙汰在之候哉否之処不相分旨」と朝令を重視している。朝廷は招致は「国家之為ニ不宜と申義者，重々被仰立有之旨返答有之事」と，征長総督としての徳川慶勝に伝えたという。つまり，幕閣・大目付等に招致の可能性について確信はなく，朝廷もそれは求めず，ただ第一次幕長戦争の処理問題として慶勝に期待し，脇坂侯等3人に難問を押しつけているといえよう。

上甲貞一は久世卿に幕府の動向を尋ねている。2月22日，白河侯（老中阿部豊後守正外）<sup>まさと</sup>・宮津侯（同松平伯耆守，本庄宗秀）が参内した。阿部には「昨年帰府後，諸事淹滞之儀も不少，自カラ人心不和之基ヲ聞キ，不被安 宸襟候間」として，将軍の上坂を求めるため帰府，本庄には「浪士共取締之為下坂」の下令があった。朝廷が政局の動向の鍵を掌握しており，「長州方御裁許向等，一切大樹公御上洛之上御決議と申処」が朝令であるとされている。上甲は雑掌宮崎右京に会ったのだが，右京は「畢竟関東隔絶之地故，双方（○朝幕）之 御沙汰途中ニ而行違」と言い，「宇和島竜野大洲江之沙汰茂取消ニ付」と，招致問題



の解消の見通しを述べ、幕命を受けた諸藩も、朝廷の意向を受けて藩兵の派遣を避けているが、これは「当然之事也」としている。

3月4日、岩国藩使者下清左衛門が来藩した。その「御口上」は「本家諸隊之者変動ニ付」、山内・上田両人の派遣について、徳山藩へ行きたいという希望が実現できず、室積に滞留させたことを非礼として詫びている。そして、防長両州における尊攘激派、とくに奇兵隊、中庸隊の動向が語られている。

宇和島藩の情報収集はきわめて活発であった。3月16日、京都の上甲貞一からの呈書が届いた。招致問題について、「右者既ニ世上ニても申伝候得共、確定之義相分兼（○中略）、今時中々彼方（○長州藩）激徒之勢、御手之着候義とハ相聞不申、御断ニ相成候処、乍恐当然と奉存候、（○中略）幕府人之事機を不解者、京詰之士分ハ皆相笑居申候」と伝えている。幕府はすでに権威を失墜し、一大雄藩に過ぎない有様となっている模様が分かる。長州処分についても、その処理能力を欠いている実態は世間一般に知られているのである。徳川慶勝もすでに帰藩していた。

4月17日、大坂から桑折駿河からの呈書が届いた。桑折は3月21日、大洲で大橋播磨・加藤玄蕃、前記の永田・吉田と用談し、加藤・永田も同道し、24日波止浜で林基吉郎も参着し、4月2日竜野着、翌3日執政脇坂采女・参政脇坂覚兵衛に面会し、三藩の会談が実現した。同日、三輪清助も室津から来ている。翌日、桑折らは出発し7日着坂、岡野助左衛門を以て塚原に応接を申し入れ、8日三輪・林も共に塚原・御手洗に会った。桑折は竜野での会談に触れ（三輪は防州探索に行っていた）、竜野藩側が「差而定見も無御坐様子ニ而、江戸表ニ而何欵御訴訟も申上候得共、何分御採用も無之、御譜代之儀、何欵心底ニ不相任」と言い、幕命の実行に自信の無さを述べ、大小監（塚原・御手洗）の命令を待つ姿勢だと伝えた。三輪は防州探索の模様を話したが、家老は老人で「耳遠ニ而且余り咄之出来候人物ニも無之、参政之方専応答も仕候得共、為差異論も無御坐、一向つまらぬ事ニ御坐候処」、外事掛役人2、3人が参会し、そのうち関矯之助という人物が、京都探索から前夜帰藩して京都の状勢を告げた。尾

張侯は招致を辞退して帰国、將軍上坂の事情から、「何様只今之御模様ニ而ハ容易ニ下手相成候事ハ無之段、先同様之見込」を述べ、桑折らと合意したと告げた。

桑折の「大小監察衆江応接略記」によると、桑折・三輪・林の「所詮御請之出来候事柄ニ無之条委曲申」述べたのに対し、塚原は尾張侯も辞退・帰国、將軍江戸発駕の日程も明確でなく、尾張藩兵を抜きにして、江戸招致は不可能であるが、三家の藩兵での護送はできぬかと尋ねた。桑折は「御請も難出来」とし、ついに警衛の話までに至らなかった。桑折はさらに今回の幕命は「皇武御一和之」の上か、世間では齟齬があるという述べ、宗城はかつて参預の地位にありながら、「只今ニ至、大事件御伺も無之、京師之御沙汰を御遵奉無之時ハ、御一和之儀も是限ニ可相成」と、公式合体論に基づいて反対の意向であることを結論づけた。塚原も「実ニ同意至極之事ニ而、別ニ定見も無之」と述べ、長防の情勢、芸州・宇和島・大洲・竜野の諸藩の反対があつては、「所詮難被行事ニ可有之、且五卿を差出候事も御請ニも不相成欵ニ致承知」と、招致問題を否定する考えを示し、幕府にこの旨上申すると答えた。桑折は幕命の撤回までもなく辞退すると結論づけている。

この宇和島藩等の招致辞任論は、もう開戦準備の進められている第二次幕長戦争においても、諸藩の避戦論・反戦論に通ずるものであり、幕府失政の実態を示すものであった。塚原らは江戸では長州藩・西南諸藩の実情を把握できず、京・大坂に来て初めて「実以至難至重之事も相分候躰にして、是迄踏出し候義後悔千万之事ニ候」と、ようやく認識を改めている。しかし、京都守護職松平容保・同所司代松平定敬らは、塚原の意見に同意できなかつた。宗城が正式に「長防取扱」辞退を幕府に提出し、桑折、大洲・竜野両侯にも会見したのは4月20日のことであつた。同月29日、桑折、三輪は京都を出発、5月6日、林・山田・兵頭とも大坂から乗船、帰国している。

## イ) 第二次幕長戦争

## 薩摩藩と長州藩

薩摩藩と宇和島藩の親密な関係については、島津斉彬・同久光を始め、田原直助らおよび、宇和島藩士が同藩の蒸気船建造等についての交流などについて述べた。この関係は、薩英戦争後、参預会議でさらに深められてくる。小松帯刀・五代才助らがそれを示している。松根図書の「滞京中他藩出合名元」によると、<sup>17)</sup>小松帯刀・町田民部・高崎左京・藤井宮内・村山下総・野村宗七・吉井幸輔・田中幸介（中井弘，英国から帰国後宇和島藩周旋方となる）・井上石見（出雲＝藤井良節の弟）・新納七郎・土持佐平太・桂木彦市・有川矢九郎・吉富直次郎・東武橋次（以上，図書が慶応3年7月上京以後も面会），川辺新兵衛・中原猶助・市来庄平・奥田九兵衛・服部清左衛門・沖直次郎・森清助・堀壮十郎・林謙造（広島藩出身）・湯地治右衛門・種可島鯛蔵（敬輔）・仁礼平蔵（平助）・江夏萩助（喜蔵）・吉原弥太郎（弥次郎）・浅倉清吾・寺島陶蔵（宗則，松木弘安）・上野敬助，以上32人に達している。これらの多くは，富国強兵策，公武合体運動，海外留学に関係するものであり，とくに斉彬に次ぐ久光の公武合体・富国強兵等のなかで，宇和島藩はその傘下に取り込まれようとするのである。しかし，翼幕論を堅持する宗城は，半面自立化を考えている。

第一次幕長戦争時，すでに元治元年9月，征長軍総督徳川慶勝の参謀長となる西郷隆盛は幕府海軍奉行・神戸海軍操練所頭取勝海舟に大坂で会見し，幕府の腐朽した内情，条約勅許・兵庫開港の実現，そのための「共和政治」（「明賢の諸侯四，五人も御会盟になり」一勝）＝雄藩連合による統一政権の構想等に同感していた。<sup>18)</sup>西郷もまた宇和島藩同様に，探偵を入れて情報を収集し，徳山・岩国・清末の三支藩を利用，長州処分は幕府の裁定に任せて撤兵を優先させた。長州藩主父子を降伏させて征長の目的を達成させ，一方では長州藩尊攘派の壊滅は避けたのである。

慶応元年正月，鹿児島に帰った西郷は土佐の坂本竜馬に会った。2人は勝海舟の思想的影響を受けていた。3月，西郷は上京したが，ここで，幕府の長州

再征の動き、つまり老中本莊宗秀・阿部正外の率兵上京、禁裏守衛総督徳川慶喜らを排除した朝廷の掌握策を見て、これを大久保一蔵とともに阻止しようとした。もちろん、宇和島藩など三藩に幕府が命じた毛利侯父子の江戸招致等にも反対であった。薩摩藩は第二次幕長戦争に反対の藩論を固め、小銃・気船を購入して軍備の充実に努めた。同時に従来<sup>の</sup>反長州の姿勢も捨てられた。尊攘・倒幕を藩論とする長州藩とは犬猿の間柄であったが、雄藩連合のために、坂本・中岡慎太郎の努力によって、しだいに両藩の提携が進行していくことになる。

長州藩尊攘・倒幕派も、同年3月、幕府が再征の姿勢を示し、4月13日には前尾張藩主徳川茂徳<sup>もちなが</sup>（慶勝の弟）が征長先鋒総督に任ぜられたが、慶勝らとともに反対して辞任し、外様大藩も再征に反対した。長州では2月に諸隊が藩権力を掌握し、桂小五郎（木戸孝允）を中心に大村益次郎（村田蔵六が改名）が登用され、奇兵隊の外に旧軍制を改革した洋式歩兵隊・砲兵隊が常備軍として編成され、百姓・町人も志願兵となり、ゲベール銃を装備して一藩割拠の体制を確立しようとしていた。武器は英国商人グラバーによって援助された。その長州藩と薩摩藩の武器購入の最初の提携は、慶応元年7月であった。坂本竜馬・亀山社中の仲介で、長州藩は薩摩藩の名儀でグラバーから武器を買い、社中が薩摩藩船で下関に運び、以後薩長の提携が実現していった。

下関（馬関）は日本海と大坂を結ぶ西回り航路と長崎から大坂への航路の要衝である。<sup>19)</sup>宇和島藩から見ても、長崎航路の中枢の地にあたっている。下関（赤間関）はその要港であり、四国連合艦隊の下関攻撃後、連合艦隊と長州藩との停戦協定では、外国船の下関海峡通航の自由の保障と友好的待遇が規定され、さらに幕府との交渉では下関開港を希望している。この下関を長州倒幕派もまた重視し、馬関越荷方を強化し富国強兵策をはかろうとした。長州藩側も“薩賊会奸”の姿勢を改めて薩摩藩に接近することを求め、薩摩藩同様に藩営工業の育成をはかり、“薩長貿易”ともいわれる外国製武器・艦船の輸入が大規模に実行され、挙藩統一の軍事体制が実現されていった。

第二次幕長戦争をはさむ、慶応元年から2年にかけての薩摩藩と長州藩の動

向について、宇和島藩はその実態を十分に把握していないように考えられる。慶応元年3月6日、宗城の許に京都在住の上甲貞一・都築莊蔵から届いた探偵書には<sup>20)</sup> 征長軍の撤兵、長州処分、天狗党始末等の報告が中心であり、長州藩の内情については、「昨年長州暴徒蒸気船ニ而外国江脱走之聞有之」とのみある。これは高杉晋作の洋行計画（グラバーに渡航を依頼したが実現せず）のことを指すのであろうが、長州藩における尊攘派の倒幕派への転向や薩摩藩への接近については、まったく触れられていない。

3月29日の山内新左衛門・上田一学の岩国からの帰国、復命によって、同年正月以来の長州藩の尊攘派と俗論派の内戦が、前記のように報告されたのだが、その「激徒」「匪賊」の兵器の近代化については触れられているが、その思想の転向についてはいまだ知られていない。

4月28日の上甲・都築の探偵書に<sup>21)</sup> 「蘭人ヨリ馬関通航之節、長州当今之形勢故、滞船之節小倉海岸へ繫泊致旨願出」、幕府が許可したことが報告されている。元治元年・慶応元年、伊達宗城は、山内容堂・松平春嶽・徳川慶喜・永井尚志・長岡護美・浅野長勲・島津久光らの諸大名や幕臣、久世通熙・近藤忠房・同忠熙・山階宮らの公卿・親王との間で密接な書翰の交換があり、その多くは第一次幕長戦争と長州処分、第二次幕長戦争への動きに関する情報が盛り込まれている<sup>22)</sup> それらについて、本稿で言及していくことは余りにも繁雑になる。しかし、第一次幕長戦争後、幕府、朝廷と禁裏守衛総督徳川慶喜、薩長、それに内訌を孕みながら動揺する諸藩への分裂が表面化し、諸外国、とくに英仏両国は薩長、幕府をそれぞれ支持しながら、日本の国内に統一政権の成立を望むようになる。そのなかで、強力な経済力・軍事力を持たない宇和島藩は、薩長とは異なる意味での、つまり保守性を強めての富国強兵、一藩割拠体制をとり、慶応2年・3年の変革期を乗りきろうとするようになる。長州藩倒幕派とはあくまでも一線を画し、薩摩藩からはその政策の一環に組み込む誘いが始まるのである。

## 第二次幕長戦争への動き

慶応元年閏5月22日、将軍家茂は上京、参内して長州再征を奏上し、大坂城に滞在し、ようやく9月21日にその勅許を得た<sup>23)</sup>しかし、再征には名分がないとし、松平春嶽ら雄藩大名は前回と違ってこれに反対し、諸藩も否定的なものが多く、再征論の支持者は慶喜・松平容保・松平定敬らであり、幕府内でも勝海舟・大久保忠寛らは反対であった。中川宮朝彦親王は幕府を支持している。

4月21日付宗城宛近衛忠房書翰では<sup>24)</sup>「自然大膳父子東下之命不受時ハ、大樹進発、再可被征討旨ニ候、実ニ不容易、一端降伏迄ニ及候ハ、今更征討トハ不存寄儀、何共言語ニ絶候」と再征に反対し、幕府等を「因循之論相立候輩多分ニテ、兎角愚拙忤トハ見込相違仕候事ニ候、何分ニモ何分ニモ因循盛ニ被行、何共歎痛之事ニ候」と批判している。

前出の上甲・都築の探偵書には、幕閣も見解が分裂し、老中諏訪因幡守忠誠・牧野備前守忠恭は将軍上京に反対して辞職（4月19日）、老中水野忠精・前老中酒井忠績が上京と再征を進行させていると報じ、「去歳者関西列国之兵ヲ動シ、諸藩ヲ勤劳疲弊セシメ候事故、最早再度諸藩ヲ役シ候事ハ不被為忍」、「幕府一手」で征討すればよいと意見を呈している。また、幕閣と慶喜・容保との間にも「兎角猜疑、厭疎之御待遇ニ成居」という反目の関係が存在した。長岡良之助（護美）が久光に上京を促したが、薩摩は「先見合候方可然」、朝幕の為になると考えた時には上京すると返答したという。また、藩士大和田隼人が久世通熙（<sup>みちきと</sup>議奏、8月参議）に面会したところ、「兎角 朝廷御不一致ニ相成兼、御不都合之段」を話している。朝廷内も幕府・慶喜支持派と反対派に分裂しているのである。幕府が洋人（ロッシュ）の援助に頼って歩兵隊を操練させ、総員3万、「加旃器械之御構モ夥敷、ゲベール三万挺、英国へ新ニ御注文ニ相成候処、英人モ余り過多ニ驚候体ニ而」と、幕府の軍制改革の進行についても触れている。しかし、「関東方諸事御処置振、近日ニ至リ益拙劣ヲ極メ、歎息之至ニ候、畢竟在位ニ其人ナキ故之事也」と幕府の実体を捉え、「天朝之方モ御同事ニ而」と付加している。

5月3日、4月22日の幕達により、将軍が長防再征討に進発、中国・四国・九州の諸侯に兵員の準備が命ぜられたとの郵書が宇和島に届き、宗城は12日に松根函書を大坂に派遣し、町田亘を随行させた<sup>25)</sup> 同月の容堂返翰には、長州では奇兵隊が「愈我威ヲ振ヒ」、岩国藩の周旋もできず、筑前藩でも「暴徒専権之赴」と伝え、土佐藩では武市半平太を切腹させ、他斬首4人、小南五郎右衛門は名字帯刀取上げの処分としたことを伝えている。

5月の上甲・都築の探偵書には、「長州人<sup>激徒異哉</sup>五六十人之内香港江罷越<sup>蒸氣船ニ而ト</sup>武器買入」に行ったという風評を伝えている。長州藩の武器購入の一端を示すものであろう。また、将軍の進発について、久世卿らから「愚考ニ者全長州再討者表向之名ノミニ而、実ハ多勢之兵力ヲ以京都ヲ制伏致候策略」と聞かされ、朝彦・晃両親王が「援幕之見込」で、孝明天皇もこれに傾いているという。肥後藩・土佐藩も率兵上京のようだが、「況や薩肥賀芸ヲ始、日本闔国之大小名一藩トシテ服従仕候所者無之理屈也」と、幕府の権勢の失墜を伝えている。

閏5月3日、江戸からの郵書、上甲・都築の探偵書が宗城に届いた<sup>26)</sup> 後者には柳川藩主立花鑑寛<sup>あきひろ</sup>に小倉藩（藩主小笠原忠幹<sup>ただよし</sup>）の応援が命ぜられ、将軍進発の総軍は旗本土分12万騎、大目付塚原但馬守・目付御手洗幹一郎が大坂から小倉へ下向した、浅野伊賀守（氏祐、陸軍奉行・外国奉行）は外国奉行柴田日向守（剛中<sup>たけなか</sup>、文久2年10月遣欧使節使の組頭、外国奉行、閏5月製鉄所・軍制調査のため正使として再度仏英に派遣された）が仏へ使節として派遣、一橋家の家士渋澤篤太郎（篤太夫、栄一）が昨年来募兵してようやく50人を得、今春西国で400人が応募し、これを「幕之猜疑尤深シ」と伝えている。幕閣と慶喜の確執である。また、探偵書には「長防者<sup>イギリスカ</sup>アメリカト深ク取結居候由」と、イギリスへの接近を風聞している。「秘説」として、将軍上洛は「必シモ大膳父子ニ関り候儀ニ有之間敷、（○中略）其実者先般ニ閣老（○阿部正外・松平宗秀の率兵上京、慶喜・容保・定敬の江戸召還に失敗し江戸に帰った）上京内通之被為行候様ニ而」と、真の目的が京都制圧、幕府の権威回復にあるという。その上、

「此節英艦余多此近海江到来之旨」, 将軍が外交権を発動して英国公使等と応接し, 兵庫開港の勅許を出させることが目的だとする。こうすると, 朝廷が幕政を左右する「難題」も是正され, 慶喜の禁裏守衛総督の権限も抑制できることになる。幕府はこのため, 老中松前伊豆守崇広に上京させ, 事前工作したが失敗し, 帰府していた。一方, 朝廷は長州処分の不徹底を「天朝殊之外御逆鱗之旨被仰出」と, 幕府を叱責した。長州藩側は小倉口・芸州口での戦闘開始, 久留米藩士多数が長州藩を支援に行き, 外国船数艘も下関に渡来して長州へ「内通一味」の様相という情報も伝えられている。仏人(公使ロッシュ)は「英人近来長人ト結び, 若政府ヨリ長ヲ征討有之候ハ、, 長之為ニ是ヲ防ント相謀候様子ニ付, (○中略) 英ヨリ妨候ハ、, 仏国者政府(○大君政府)之為援兵ヲ出シ, 英兵ヲ攻伐可仕候間」と, 幕府支援の立場を幕府に説いていたという。諸藩では「因備土尾芸宇六藩共援長家也ト之浮説有之候由」と伝え, 上甲・都築はこれを「幕下之小吏輩欵, 親藩諸士杯之私言」と断定している。5月15日, 吉川監物からの情報として, 「奇兵隊之者共, 壬戌丸癸亥丸ヲ売却シテ火器ヲ求メンカ為, 上海江進航仕候相聞」という情報を得ているが, これは高杉晋作らの密航計画が洩れたものであろう。長州藩主毛利敬親は, 再長征に敵対しても勝算なく, 「是非御征伐可相成候ハ、, 其時者其時之処置可有之候間(○下略)」と, 暴発を禁ずる布告を藩内に出していたという。22日に将軍は二条城に入っている。

### 宇和島藩の出兵

慶応元年5月5日, 藩主宗徳は中国・四国・九州の諸藩に出兵の幕命があったことを藩士に達し, 8日には前隊に出張の準備を命じ, 藩主自身の出馬もあるとした<sup>27)</sup> 12日, 勘定奉行から藩主出陣の場合の兵糧・薪等の運送について指示した。7月7日, 前後隊鉄砲頭中から出張医師の増員(負傷者・流行病), 武器類の配布と運送と荷船の手配, 村夫(陣夫役)の徴集(30人, 組に13人の割で鉄砲組へ)について伺書が出され, 許可された。江戸藩邸では, 「近来御失費多キ上ニ御出陣アリ, 多額ノ費アリ, 元来饒ナラザル上ニ此ニ及ブ, 御参勤(○元治元年9月1日復活)等公務の御



断リノ外ナシト深ク御配慮ノ際、猶又將軍殿進発、御領内ニ兵ヲ整へ、令ヲ待テ御出陣ニモ及ブベキ勢トアレバ、御邸ノ者又出陣ニ及ブモ計難クシテ一層ノ費アレバ、旧例ニ拘ラス、(○下略)」、藩邸の経費節減、人員の削減、臨機の派兵の準備をし、幕府の「積年ノ恩ニ報ルノ覚悟ヲ為ス可ント」、在府の藩士に訴えている。宇和島藩の佐幕の側面がうかがわれよう。

5月7日、宇和島城の鎮守山王神社下の鉄砲庫が狭いため、2間に10間(20坪)の置場を建て、江戸から回送させた長威遠銃の施条銃1、12斤迦農<sup>カノン</sup>1、150目野戦砲2、新造のボートホーウィッスル2、計8筒を収蔵することにした。また、御庄砲台に装備予定のカルロレナーテ1門、江戸に装備する長威遠銃2門、短威遠銃1門、計4門を「早管打ヲ鶯管打ニ改造」するとしている。

5月16日、藩主宗徳は、威遠流砲術見分のため猪越に行った<sup>28)</sup>この日、宇和島に將軍の上坂は長防処置のため延期するとの幕命(3月付)が届いている。

4月朔日、「長防未タ鎮静」せずとして、派遣中の塚原・御手洗に抗命すれば、急に進発するので準備せよ、20日には塚原・御手洗の復命はないが、「長防ニ悔悟ノ形勢ナリ、不容易企アリ」、將軍は5月16日に進発すると、江戸留守居役に伝達され、將軍の留守中、前老中酒井忠績<sup>ただしげ</sup>(姫路藩主)に政治を委任し、同本多忠民<sup>ただもと</sup>(岡崎藩主)・老中水野忠精(山形藩主)に補任を命ずる等の法令を伝えた。5月17日、藩は領内の戒厳、他藩人との接触、謹慎第一を命じた<sup>29)</sup>また、水主の大砲・小銃の訓練を強化し、諸組の鼓手を威遠流付きとし、江戸湾の預り砲台陣屋詰(三ノ砲台)の人員配置を改めた。22日、大坂に備蓄の軍用金5,000両を札座に返し、出張費1万5,000両の内の残金を金蔵入りとしている<sup>30)</sup>27日、火薬製造場三棟が大破し、これを修復している。江戸では、佐々木貞庵に洋学修行が許され、横浜に住居して8月3日まで滞在した。このころ、藩は国友権四郎が小銃・弾丸の製造を盛んに行っている。閏5月7日には、鉄砲師九右衛門(安達)、国友長右衛門が小銃を製造し、生兵訓練も続行されている。市中大船株は5艘であったが3艘に減船していた。これを軍費用を考慮して5艘に復元している。また、この日、松根・町田の上坂が中止された。6月6日、

宗徳は新砲台（恵美須山）を見分している。

6月5日、熊本藩士2人が長岡良之助（細川護美）の書翰を持参し、土佐にも行くというので、井関新吾（又右衛門の子、230石、近習・目付見習、のち本役）が同行した<sup>31)</sup>長岡の閏5月24日付宗城宛書翰には、將軍上洛と「武威御挽回」を期待し、長州問題では「格別岩国等尽力有之旨」と情勢を認識し、長征の実行はなされるのかと考え、熊本藩が江戸で長征軍の先鋒を幕府に願い出たことを「小子も不快候」と批判の姿勢を示している。熊本藩の藩論（建白）は、「全名義を正し 尊王之意を以御長征被為在度旨ニ而」、先鋒を命ぜられた場合は「其俟御請申上候事ニ御坐候」と、長征支持の態度を明らかにしている。藩士2人の派遣は四国情勢の探索のためで、宇和島藩・阿波藩・土佐藩について情報収集の便宜を求めている。同月19日、藩士西園寺雪江・山下清記が肥後から帰着し、使者として復命しているところを見れば、親交のある宗城と護良は、征長問題について情報を交換していたことが分かる。「復命」によると、6月2日佐賀関に着き、「トノミ早船」が鶴崎の船大工によって建造されていて、宇和島藩の船宿主人理平太（前出）から、宇和島藩も30艘程建造を頼んでいるといったが、これは「皆商船にて官船ニハ無之事」とされている。6日夕方熊本着、藩主細川韶邦（慶順）に宗城書翰と土産の国産品、護美に同書翰が持参され、護良に面会し用件を話すと述べている。西園寺らは「表向候使者と申にも無御坐、極内使者に而微行（○下略）」と旅装のまま応待し、西園寺は知行300石・見付役、山下は200石・側小性と称し、家来として刀指1人・小者2人を連れていた。7日、国友半右衛門に面会し、韶邦・純之助（韶邦の弟護久、のち熊本藩知事）・良之助（同護美、分家して長岡姓）に宗城からの口上を伝えた。国友との雑話中、国友が最近岩国・芸州に行き、先月18日に帰着したが、岩国で徳山藩が「未藩嘆願書」を宇和島藩に依頼したというのが事実かと聞き、西園寺は是認した。西園寺は熊本藩が長征の先鋒を願い出たのかと糺したのに対し、国友は江戸藩邸の役人が幕府に伺書を出したため、幕府から命ぜられ心配している。韶邦からも建白書を提出し、その主意は「尊藩御建議同様」で、長州罪

状を塚原但馬守が詰問に行き、「彼も屈伏之上、御征伐ニ相成候ハ、御成功モ速ニ可有之、匹夫を誅<sup>マ</sup>さや、必彼に罪の次第を申聞候上にて可誅、況や長防にてお<sup>マ</sup>ゐる也と申候意ナリ」と、最終的には態度を明らかにしていない。西園寺はこの点を、建白の主意に「不容易及企云々有之处」、これはどういう事件かと詰めた。国友は「都而合点不参」と答え、吉川監物から外国奉行柴田日向守剛中の「外国人御応接書附」を入手し、長州藩が「外国と通信等仕候ヤの御疑」もあつたが、この事実は「無之趣承り候」と言っている。長州問題については、熊本・宇和島両藩とも真意を明らかにしてはいない。

さらに西園寺・国友は薩摩藩の小松帯刀・大島吉之助（西郷隆盛）の動向、大宰府における五卿の生活振り、将軍の上坂「都て御征伐等の御模様無之事」、筑前藩・芸州藩・五代才助の英国行き、土佐の中浜万次郎（同断とあり、五代とともに英国に行つたと考えられている）、小倉表の塚原・御手洗の要請により、熊本藩は60人、柳川藩も派兵したという。

8日朝、長谷川仁右衛門嫡子に面会し、長州藩探索の情報を得た。長谷川は4月長州探索に行つた者の話として、以前熊本藩を脱藩した河上源齋（彦齋、禁門の変後長州に逃げた。元国老付防主）が、長州藩諸隊の内700人程の隊長となり、宮部呈蔵（鼎蔵、兵学師範、池田屋事件で負傷し自刃。肥後勤王党の中心人物）が山口新城の縄張りをしたが、京都での生死は不明とされている。同藩は天保期以降、勤王党（林桜園流）・学校党（時習館流）・実学党（横井小楠流）の三派が対立して藩内事情は複雑であつた。そのなかで、護久・護美は兄韶邦を援護し、勤王党の攘夷論から脱脚して公武合体論を藩論としていた。

9日朝、国友が来て「五卿も此先の模様不相分」と伝え、「肥前（○佐賀藩）の模様更ニ不分」、「肥前にハ建白等致候者無之よし、一國中閑叟様に者余程恐居、アノ親ジニ云タテイケント云テ居候よし」、と閑叟の文久年間以来の政治姿勢の不鮮明さと同時に、独自の藩論と改革の進行がなされていた。宇和島藩・熊本藩にとって、佐賀藩・福岡藩・久留米藩の藩内事情の掌握は重要事であつたが、情報収集は困難であつた。ただ、佐賀藩の軍事改革、反射炉の建造、殖

産興業と茶・蠟の交易は高く評価され、「御一國中御政事向御届被成候ハ実ニ感心仕、可恐国に御坐候」と高く評価されている。

12日、佐久間角助(奉行役、知行500石)に西園寺は面会した。佐久間は「此度御進伐者至当とハ存不申」と述べ、征長には「公然と罪を御布告に相成候上」つまり大義名分を明らかにして幕府は出兵すべきで、「左様無御坐候而ハ、都て御断申上、一切差出不申心得ニ御坐候」と言っている。出兵の場合は、鶴崎・佐賀関から渡海するだろうが未定としている。同日夜、寺尾多門から「肥前者是迄幾度参候而も不相分候ニ付」、藩主韶邦の書翰を持参して国論を聞いたが、明確な返答はなく、出兵の用意のみしているということであった。久留米藩も出兵には消極的で、「諸藩御議論も寄一同可伐と申義」になれば派兵する考えだが、「夫迄ハ先相扣候と云」ったという。

13日、長谷川七兵衛に面会した。長谷川は長征が実行されると、長州藩は「一国一致に相成、仮令焦土に相成候とも、王師江御敵対申候心得」であり、以前のような寛典では人心が離反するから厳刑を願うと述べている。西園寺は6月9日付の「長岡侯御書」を宗城にもたらしたが、その中で護美は「長防御処置のみならず、五大洲之鎮撫、第一 皇国之盛衰 將軍家之御興廢も実ニ危急存亡之秋」という時局認識を示している。西園寺の報告によって、宗城は混沌とした九州情勢についての知見を得、さらに一藩割拠論の確信を深めたであろう。

6月29日、上甲・都築の探偵書が届いた。<sup>32)</sup> 幕府軍と諸藩の動向が詳述されている。將軍は前月22日に参内した際、朝廷から「二大箇条」の質問があった。

「其一ハ長州不容易企云々之義ニ御座候処、御答ニ、兼而小笠原家(小倉城主、譜代大名)ヨリ報告之趣モ有之、長人洋夷ニ咨謀之義、洋人江相尋候処、其謀議者悉ク吾政府(○幕府)之為ニ不相成義共ニ有之、且長人火器買入之為海外へ相渡候等、皆実跡有之事ニ付、此義ヲ指而不容易企ト申候旨」とある。つまり、幕府にとって、長州藩の罪状は「洋夷」つまり英国からの武器購入、倒幕の挙動を第一とし、これには洋人、つまり仏公使ロッシュらの幕府支持の立場からする助言があった。第二に「其一ハ諸侯参府、妻子府住復旧之義ニ付、前

以 勅諭之趣モ有之、右者応否如何ト之事ニ候処、此義者何分当下ニ奏聞難仕、征長相済、帰路之上可及春答ト之御答ニ候処、両条共御許允有之」と、朝廷が参勤交代制の復活問題を糺したのに対し、幕府は征長の短絡的実行を優先させている。朝命は「征長之義ハ猶又一橋会津始と討論熟議之上挙措ニ可及」と、慎重を期待したが、従来存在した幕府と慶喜の確執は、征長問題については「嫌疑」も氷解していたという。上甲は久世通熙に、都築・斎藤丈蔵は京・大坂で情報を収集しているが、幕府内の情報は「何分適実之義相分り可申」とされている。

7月2日、6月3日付久世書翰、上甲・都築の探偵書が届いた<sup>33)</sup>前者は将軍の下坂と再征の進行について、宗城が「彼是御配心恐察仕」と述べているが、その内容に具体性はない。久世は上甲に、将軍下坂を「伝聞之通諸事都合向宜敷爰元(○京都)引払ニ成、万端浪華ニ於テ処置有之様成也」と、朝廷は征長に関係せず、すべて幕府の処置だとしている。朝廷は朝幕の有力公卿・大名が集議して「寛猛之際、至当之御処置」をして後に征長に取り組みばよいと考えている。上甲は大坂での評議となれば、幕府が数万の兵威で朝廷を圧倒する可能性を指摘したが、久世は一橋・会津が参謀であり、「朝廷之御主意ヲ御佩服之御方々様」であると答えている。しかし、究極的には「此度之一条ハ幕府一己之処置」ではなく、「朝廷江伺之上決着」するものとの考えを示している。さらに、上甲は朝幕間の調停、江戸幕閣と大坂滞在中の将軍らとの意見の相異の問題も尋ねたが、明確な返答はなかった。

7月4日、井関新吾が山内容堂に謁見して帰国し、その書翰をもたらした<sup>34)</sup>容堂は「何分不出十年、天下大開国ニ可相成、ト角航海專要ト存候、弊国区々二十万石計ニ而ハ、中々カラ足り不申、右ニ付航海局ヲ新ニ開キ、僕大将ニ成り、産物ヲ為積、地球中ヲ如意飛行可致、何レ火舶モ一二艘ニ而ハ不足故、近年之内十艘計ハ閣度存候、足下如何、何分航海之余力ニ而火舶等取入候様無御坐テハ、カラ難続候、足下モ是非一二艘ハ御気ハリ可被成候」と述べている。尊攘論の振興の段階では、宗城は思想的に優位であったが、開国後は西南諸藩

の強力な富国強兵策の推進のなかにあつて、その実行は跛行性を呈してきていた。宇和島藩は薩長土肥などに、明らかに後進性・保守性を見せるようになっていた。

7月13日、都築莊蔵が帰藩し、見聞録を提出した<sup>35)</sup>。その中に「越前侯建白」があるので、幕長戦争における宗城と春嶽の情報交換について見ておきたい。元治元年8月29日付宗城宛書翰に<sup>36)</sup>「今般征長之一事ニ付、縷々被仰越候事件悉く得其意、殊ニ密々御探索之事情、彼藩内情も相分り」とあり、第一次幕長戦争時より、宗城から長州藩内情も加えての詳細な情報が届いていた。11月11日付の春嶽書翰では<sup>37)</sup>「扱者長藩へ被遣候貴价往返之顛末」、つまり8月の清崖・晦巖二僧の徳山派遣と謝罪勧告と「同人聞見之条件、一々御内示委曲得委曲」とあり、また、長州藩尊攘激徒、鍋島閑叟の上京と時局傍観の態度・疑惑にも触れられている。翌慶応元年3月18日付春嶽返翰には<sup>38)</sup>「尾督府<sup>○慶勝、時に征長総督</sup>も在京、防長事務未た局面を終へ兼、内外多端、(○中略)防長偵探之者御差出置之由」と、宗城に情報の提供を求め、長州処分の困難性を訴えている。7月17日春嶽返翰では<sup>39)</sup>長州藩は「何分ニも恭順之道相立候様無之而者、彼藩社稷存亡者差置、天下之治乱ニ相拘」との認識を示し、宗城に対する幕府の嫌疑の心配はないとしている。上甲は、幕府側の長防(岩国・徳山両藩を含む)に関する情報収集の動きを知らせている。

7月16日、土佐藩使者苅屋祝太郎が来藩し宗城に謁見して、7月11日付の「容堂侯御書」を呈した<sup>40)</sup>。藩主豊範が10日に帰国し、将軍家茂は形勢により姫路・広島に出張、毛利敬親父子は死罪と江戸の幕閣が決定したが、慶喜がこれを諫止した。徳山・岩国両藩主を大坂に召喚し、伏罪すれば「名家故寛大之御沙汰と半決候赴、貴意如何」として、長州藩の伏罪は困難で、「何レ砲声ヲ不聞シテ所置ヲ付候事、今ニ至万々難事ニ御坐候」と結論し、「大君御参 内之節ハ大極上之御都合」とし、慶喜の尽力により真の公武合体の状況を評価する。

7月24日、20日付の容堂書翰が届いた<sup>41)</sup>。容堂の家臣も小倉からの帰途、宗城に謁見し「足下之近状頗詳悉、洋人応接等之事も伝聞」したという。征長につい

て薩摩藩は出兵せず、宇和島藩も「亦不出兵」というが、薩摩の非戦論と宇和島藩のそれは、「其意則異之、是非容堂先生不能看被也」と述べている。薩摩藩の長州藩援助と宇和島藩の翼幕のための避戦論に対し、土佐藩はまた異なるというのである。容堂にも「此後割拠、英雄唾吐時、足下何ノ処ヨリ下手ヤ、卓見承知度もの也」と、容堂は宗城の時局観を日和見論と考えていたようである。

7月25日、7月17日付慶喜書翰が宗城に届いた<sup>42)</sup>。宗城は慶喜も連絡を保っていた。慶喜は宗城の質問に対し、「第一今般 御進発ニ付而者、最初諸向懸念之模様と相替り 公武御都合至極御宜敷、從而拙輩嫌疑も殆と釈然之勢、且防長御処置振も悉順序相立、諸藩一躰ニ居り合候様子ニ而、後来之変革ハいさ不知、当分之形勢先ツ先ツ安心之場合ニ相運ひ申候」と、征長の準備が公武合体、諸藩合意の上で進行し、これは將軍の聡明さと会津藩の尽力にあると言う。しかし、事實は土佐藩・加賀藩のように帰藩する事例もあり、老中本庄宗秀の解任問題もあった。

8月5日に届いた容堂書翰には<sup>43)</sup>宇和島藩が「蒸気船も不遠御取入の赴可賀候、々々」とあり、蒸気船購入の意向を公言していたことが分かる。土佐藩では「国内ニモ金銀銅鉄鉛石炭開可申、銅鉄石炭ハ現ニ開申候」と、富国強兵策の進行を誇示し、征長については「何レ表之御所置モ両三月ニハ可結局欤、只今之勢合点不參候」と、疑念を表明し、さらに宇和島産の蠟燭と土佐の国産物との藩際交易を要望している。これは薩摩藩とも共通する貿易構想である。8月21日、防州三浦伝右衛門が三机浦に来ているが、その事情は不詳である。22日、藩は物産方に製茶場を建設している。

同月、久世卿・長岡護美・島津久光からの書翰が届いた<sup>44)</sup>。久世は毛利讃岐(清末藩主、元純)吉川監物がやがて上坂するはずであり、「至当之御処置」を希望するという。この頃、「人心も治り候て、其以物静ニ相成申候」と、京都情勢を伝えている。護美の書翰では、「徳山岩国日延相願候由、(○中略)諸隊之激徒勢愈相募、御再征と被仰出候処ニ而ハ、安易ニ謝罪之勢ハ無之、國中何れも必死之覚悟之様ニ相見申候」と、全く正反対の情報を伝え、征長に批判的である。

久光は「賢兄御同論に御坐候」、大島（西郷）には旧冬小倉で会ったが「愉快之英傑」と評価し、熊本藩の富国強兵策は「未運用調兼」としている。久光書翰には、「賢兄にも例之幕疑故、御傍觀却而御休暇候由」、宗城への幕府の疑惑は久光への半分以下だという。

9月朔日、上甲および大坂藩邸から探偵書が届いた<sup>45)</sup>。上甲は久世通熙に会い、京大坂情勢を尋ねたが、「閑静無事也」、「都而新聞無御坐」ということであった。しかし、上甲の質問に対し「薩摩之人気兎角不静、元来橋会ト合体仕兼」と述べ、朝彦親王や関白も、薩摩とは「近時ニ至り追々御疎情ニ相成候様子ニ而、何角ニ付薩之志モ難伸当御時勢、此先見通し難付、詰ル処瓦解割拠ニモ可相至、就而者京都之義者勿論、幕家之御任ニ候得者、外藩之可着手筋ニモ無之ニ付、薩ハ薩藩丈之身構ニカヲ用ヒ、他方之義ハ無頓着ト申様之人気ニ而（〇下略）」と、薩摩藩は西郷を中心に、天狗党の捕虜の薩摩流罪を拒否して幕府に抗議し、尾張・越前を始め外様大藩の多くが再征に反対するなかで、再征の勅許に反対しているだけでなく、坂本竜馬・中岡慎太郎の仲介により、薩長提携の実現が芽生えていた。この薩長両藩の動向の持つ意味を、朝廷・幕府は深く認識できていない。宇和島藩も薩摩藩の親長州への転回を十分に見抜けなかった。

上甲の「八月十七日謹誌」によると、14日に小倉藩周旋方入江宗記が齋藤丈蔵の寓居に来て、長州藩重役が小倉藩重役に書状を送った。長州再征の根元は、宇和島侯から「於横浜外国奉行（〇柴田剛中）蘭人ト応接之趣ヨリ相起り候事之由」伝達があった。この件について、馬関に来舶した和蘭船に詰問したところ、「横浜応接」の件は、「小倉ヨリ長州外国人ト馬関ニテ親近事ヲ謀候様、縷々幕府江被仰立候ヨリ之事」と答えた。長州側は事実無根、証拠を示せと小倉藩に抗議し、同藩は「宇和島ヨリ通達」と答え、「大ニ迷惑心配」したことを告げに来たのであった。齋藤は小倉出張の大小監察から宇和島藩に情報の提出が求められたため「早速委細御答申上」げたことで、「伝達」といわれたのでは、「於弊藩モ甚迷惑至極之事」と答えている。この事件の実相は不明だが、宇和島藩



が征長軍の監察に情報を提供し、長州藩がこれに反撥している点は重視してよい。斎藤は「此上幕府御吟味如何相成可申哉」と心配している。福岡藩における勤王派弾圧事件も詳細に報告されている。

9月16日、家老松根に上坂が命ぜられ、町田亘が随行し、10月22日に出立している。これは征長軍の軍議に参加するためであろう。10月23日、上甲・大坂藩邸からの見聞録が届いた<sup>46)</sup>。長州支藩の清末・長府侯および萩藩家老も上坂が命ぜられ、拒否した場合、直ちに征討するので、芸州藩に藩兵の出陣準備、列藩留守居役にも出陣の心得が命ぜられた。薩摩藩は西郷吉之助が返答した。第一次幕長戦争は「陣払」になっているにもかかわらず、「將軍家御進発被遊候ハ、如何之義ニ可有御坐哉、体段悔悟降伏之者ヲ御征誅ト申筋者無之」と反対し、「況無名之出軍ニ而ハ、仮令御命タリ共、死力ヲ出シ御応援、戦争ヲ可遂心底ニハ相成不申」と述べたという。この趣旨は、田中幸助（中井弘）を通じ上甲に伝えられた。京都非常警衛の薩摩藩兵は、西郷らの指示により多くが帰国した。薩摩藩は軍備を強化して割拠体制を整え、西郷らは長州藩激徒を保護し、在京者で公武合体論を持つのは、高崎左京・海江田武次の2人のみと言っている。田中幸助は西郷同様に「壮年之激士」と上甲は記している。薩摩藩は上海に琉球館を建築したという風聞もあった。「大坂見聞録」には、「徳岩両家病ト称シ、上坂延引之義」と幕府の召喚を事実上拒否したこと、長州藩は西南諸藩に遊説を強化しているとしている。幕府側は前月28日に所司代松平定敬が帰京、老中格小笠原長行が30日に着坂、大目付永井主水主・戸川伴三郎（鉾三郎、やすなる安愛。目付）も上坂して、征長の体制を強化した。また、彦根藩士小西左衛門の広島からの報告として、長州藩には「是迄釀罪之義ハ更ニ悔悟之体無之」としている。

同月26日着の見聞録には、英仏蘭ら諸外国の条約勅許、兵庫開港要求があり、幕府は「此度ハ開鎖御一決定無之而ハ相済間敷、不開則彼不服、開則内地不服、幕府ハ実ニ多事中之多事」とその窮状を指摘し、老中阿部正外・小笠原長行らが大坂で応対し、とくに英人（公使パークス）が強硬な姿勢を示したと述べて

いる。

これより前、7月7日、藩は山内平太・安代鶴夫・中井族之助組友太郎に陸軍歩兵操練修行を命じ、19日に長崎に行っている<sup>47)</sup>同時に小倉滞住の大目付塚原但馬守らとの間には密接な連絡がとられている。27日、これまで貯蔵の火薬2,600貫目の内2,000貫目は「一日搗」の不良品、400貫目も製法不良、良品は200貫目のみとされている。外に小銃火薬兵具方に貯蔵の1,000貫目は硝石は良好であるが「雷発」ではない。これに硝石220貫目・硫黄24貫200目・麻木灰48貫800目を渡されれば新製造し、不良品と交換したいと、松田源五左衛門・中野七郎兵衛・居坂八十八が伺い出て許可されている<sup>48)</sup>火薬の不良品は宇和島藩の弱点であった。ライフル銃の導入により良質の火薬が必要であった。

8月7日、樺崎・恵比須山両砲台を威遠流に預け、船手の者を煩手に加えている<sup>49)</sup>17日、町田弥兵衛四男呈蔵(西洋学・文学修行)が長崎・江戸に行き、中村敬輔(敬宇、幕臣。漢学者、慶応2年遣英留学生、洋学者となる)や塩谷甲蔵(宕陰)に従学し、さらに継続しようとしたが、長州再征のため所期の目的は達せられなかった<sup>50)</sup>30日、老中阿部正外の召喚により、岡野助左衛門が公用人関四郎兵衛の許に行った<sup>51)</sup>用件は毛利元蕃・吉川監物の大坂招致に代わり、清末藩主毛利元純・長府藩主毛利元周を9月27日までに大坂に出頭させるを広島藩主浅野長訓(養嗣子は長勲)に命ずるというものであった。「出坂無之候得ハ可被及戦争候」というもので、宇和島藩はこのことを前隊大頭・旗本頭等に伝達している。

9月朔日、大坂から望月八郎左衛門が帰国した。その復命書に<sup>52)</sup>望月は將軍の機嫌伺いに8月16日に行き、老中阿部正外に対し使者を勤めているが、征長の件は一切触れられていない。12日、藩は文武・蒸気船・洋学修行者について、目見以上は金35両と2人扶持、以下は金29両と2人扶持を支給し、別に蒸気船・洋学修行者には雑用料を目見以上に金24両、以下に18両を支給することになっている<sup>53)</sup>24日、松本角左衛門・岡田左内が広島に派遣されている。27日、恵美須山砲台が完成し、入江左吉・森猪之助ら多数が褒賞されている。これで、

宇和島藩は城下防衛のための2砲台がようやく実現された。

10月3日、薩摩藩使者吉井幸輔が来藩した<sup>54)</sup>。その詳細は明らかではないが、宇和島藩の動向に関する牽制であろう。7日、大坂で老中松前崇広から征長の勅答を拝見させられたという報告が届いた。12日、藩は火薬7,591貫目、軍用鉛8,013貫目の現有量を確認している。弾薬はライフル銃用、ゲベール銃用として製造されている。

この頃、大坂では外国問題について老中阿部正外・松前崇広がパークス等との折衝に当たり、9月25日には兵庫開港を一たん決定した。しかし、慶喜は勅許のない開港に反対して対立し、両老中は朝廷から罷免されるという異常事態が発生していた。10月1日には家茂も將軍職を辞任して帰府すると言い、これはようやく慶喜がなだめていた。しかし、江戸城では、10月14日、諸大名総出仕の上、閣老水野忠精が勅諭書、外国処置・將軍職辞任の件を通達し、宇和島には11月朔日にこれが届いた<sup>55)</sup>。「臣家茂家族之内ニテ、慶喜儀者年来 闕下ニ罷在、事務ニモ通達仕、大任ニ堪可申奉存候ニ付、臣家茂退隱、慶喜ニ相統為仕、政務相讓申候間、臣家茂時ノ如ク諸事御委任被成下候様(○下略)」とある。これによって、江戸幕府は幕藩統一権力を失い、朝廷と慶喜、雄藩大名の権力抗争の時代を迎えることになる。征長と兵庫開港問題にそれが明確に表れる。

11月16日、閣老板倉勝静から藩士岡野(大坂留守居役)への伝達書が届き、藩主宗徳に大目付永井主水正の広島派遣、および、芸州口・石州口・上之関口・下之関口・萩口追手の命があり、宗徳は上之関口追手の一之先(軍監竹尾戸一郎)が、松山藩主松平定昭に次いで攻撃軍に加えられた<sup>56)</sup>。阿波藩主蜂須賀斉裕も一の先に加えられ、この三藩との間には直ちに出兵について連絡がかわされた。12月22日、八幡浜浦に番所が新設され、宮川轉を長とし、庄屋・村夫・猟師に船3隻、鉄砲10挺、大砲2挺を渡している<sup>57)</sup>。

11月16日、11月7日付の久世通熙答書が宗城に届いた<sup>58)</sup>。兵庫開港問題について、宗城に「何故哉、幕府と嫌疑を御請被成候様御伝承之趣、(○中略)扱気毒千万之儀」と述べ、嫌疑については朝廷に工作するとし、「武備充実、御国威

相立候様」と希望している。同日来翰(11月14日付)の春嶽答書には、宗城が春嶽に京・大坂の情報を求めたのに対し、薩摩藩士吉井幸輔の来藩、「弊国之議論ハあらかじめ藩と同論にて、大久保一蔵(○利通)弊国へ馳参前(○下略)」、拳藩「親藩之甲斐無之と存」、周旋したが「大着眼無之」という。薩摩藩は征長反対、条約勅許に協力を求めて、吉井幸輔を宇和島・福井に、さらに大久保を派遣した。大久保は近衛家・山階宮・尹宮(朝彦親王)にも、征長の勅許に反対を説き、慶喜・容保とは対立していた。春嶽は英仏軍艦の摂海滞留、征長を「此度ハ天下安危ハ勿論、徳川家之浮沈」と認識しているが、10月4日の小御所会議で、二条関白・右大臣徳大寺公純・内大臣近衛忠房・賀陽宮(朝彦親王)・山階宮らの公卿・親王、慶喜・容保・定敬・小笠原長行が会合し、翌5日、条約勅許・兵庫開港は不可との結論を出した。薩摩藩の諸侯会議の路線は敗退した。これを見て、春嶽は上京を中止し、宗城にも勧告している。慶喜らの動向を見て、「有志之諸侯」の上京を考慮している。

宗城は11月25日発の見聞録によって、京都情勢を悉知している<sup>59)</sup>。「武家モ割レ割レ、一会桑ト幕吏ト内輪ニ而権ヲ争ヒ、外藩モ勤王家ト勤幕家ト分レ、官家モワレワレ、御役人モワレワレ、偕々六ヶ敷六ヶ敷相成申候」という情勢認識が伝えられている。

このような政治情勢のなかで、宗城夫人猶が、慶応2年2月18日、宇和島で死去した。その葬儀は多忙であり、宗城は暫く政治から離れる。約2カ月余、宇和島藩には政治的空白の時期があった。

#### 注

- 1) この項、慶応2年6月、パークスの宇和島訪問、同年12月のアーネスト・サトウの来航の項で詳述する。
- 2) 伊予地(下路)通行という。宇和島—卯之町—大津—松山(三津)—波止浜を陸路で往来し、藩船のみ佐田岬経由で波止浜へ回漕する。波止浜から乗船し、一日で尾之道に着船、船は宇和島に帰航させる。
- 3) 「竜山公記」4 2月22日条
- 4) 同 5 3月2日条
- 5) 同 5 3月29日条

- 6) 慶応2年6月、英公使パークスの宇和島来航時、宇和島藩はエンフィールド銃やライフル銃で武装した475人の大隊を持ち、洋式訓練に著しい進歩を見せていた。石井孝『増補明治維新の国際的環境』540ページ。エンフィールド銃は1853年英国で採用された前装式ミニエー銃。口径14.66ミリ、歩兵銃は全長125センチ。弾丸はガス圧でライフル溝にくいこむ。照尺1,200ヤード。文久年間には輸入されはじめた。前装式の最優秀銃。『国史大辞典』吉川弘文館。宗城書翰などで「空気銃」と出てくるのはこの銃であろう。
- 7) 「竜山公記」5 4月17日条
- 8) 同 4月30日条
- 9) 同 3月25日条
- 10) 子安峻<sup>たか</sup>、宗峻。美濃国大垣藩士。下曾根金三郎・佐久間象山に砲術・蘭学を学び、さらに京都の広瀬元恭に兵学・蘭学、辻令輔に舎密学を学ぶ。文久2年開成所教授手伝となり、横浜運上所の通詞取締となった(1836~1898)。英学『附音挿図英和字彙』「英国海軍律令全書」など編集。なお村田蔵六にも蘭学を学んでいる。武内博編著『日本洋学人名事典』柏書房。アレキサンダー・フォン・シーボルトとの関係の深いことにも要注目。
- 11) アメリカの長老派の宣教医。1859年10月来日。63年横浜居留地39番に施療所と英語塾を開く。『明治維新人名辞典』
- 12) 「竜山公記」5 4月27日条
- 13) 同 3月11日条
- 14) 同 6 5月13日条
- 15) 「藍山公記」5の3 3月11日条 招致問題に関する史料は極めて詳細であるが繁雑を避けることにした。
- 16) これらの記録は、すべて3月11日条に羅列してある。
- 17) 『松根図書関係文書』(『宇和島・吉田旧記』7)89ページ この中には京都だけではなく、長崎等での面会者名も含まれている。なお、長州藩関係では、伊藤俊助(伊藤俊輔)・滝弥太郎・高須勝馬・大村益次郎の4人のみである。
- 18) 井上清『西郷隆盛』上168~ 中公新書、この項は同書による。
- 19) 田中彰『幕末の長州』133~ 中公新書
- 20) 「藍山公記」5の3 3月6日条
- 21) 同 5の4 4月28日条
- 22) 「御書翰類」第11・12巻
- 23) 征長問題と外交上の条約勅許・兵庫開港問題については、幕府・慶喜とそれを支持する仏公使ロッシュ、薩長を支援する英公使パークスの動向を考える必要があるが、これについては別項で触れたい。
- 24) 「藍山公記」巻5の4 4月28日条
- 25) 同 5月3日条

- 26) 同 閏5月3日条
- 27) 「竜山公記」巻6 5月3日条
- 28) 同 5月16日条
- 29) 同 5月17日条
- 30) 同 5月22日条
- 31) 「藍山公記」巻5の5 6月5日条
- 32) 同 6月29日条
- 33) 同 7月2日条
- 34) 同 7月4日条
- 35) 同 7月13日条
- 36) 『徳川慶喜公伝』巻6 199ページ 449
- 37) 同 210ページ 461
- 38) 同 258ページ 491
- 39) 同 284ページ 507
- 40) 「藍山公記」巻5の5 7月16日条
- 41) 同 7月24日条
- 42) 同 7月25日条
- 43) 同 巻5の6 8月5日条
- 44) 同 8月30日条 毛利讃岐は徳山藩主毛利元蕃(淡路)の誤りであ  
う。
- 45) 同 9月朔日条
- 46) 同 9月23日条
- 47) 「竜山公記」巻7 7月7日条
- 48) 同 7月27日条
- 49) 同 8月7日条
- 50) 同 8月17日条
- 51) 同 8月30日条
- 52) 同 9月朔日条
- 53) 同 9月12日条
- 54) 同 巻8 10月3日条
- 55) 同 11月朔日条
- 56) 同 11月16日条
- 57) 同 12月22日条
- 58) 「藍山公記」巻5の6 11月16日条
- 59) 同 上